

ミズアオイとコナギの学名と 遺伝的多様性

はじめに

ミズアオイ科のミズアオイ *Pontederia korsakowii* (Regel et Maack) M.Pell. et C.N.Horn は、沼や水田などに生育する抽水性の一年草である (田中 2015)。北海道～九州, 東アジアに分布する (田中 2015)。日本では 8～10 月に開花し, 多数の花が総状花序につく。ミズアオイは花柱が右に位置する花と左に位置する花の 2 種類の花を着ける鏡像花柱性という特徴を持ち (図-1 左), 昆虫による異花受粉の仕組みとして働くことで不完全ではあるが自殖回避機構を持つ (Wang *et al.* 1995; 汪ら 1996a; 藤野ら 2016)。ミズアオイは, 古くから文献にも記録されており, 日光東照宮や久能山東照宮にはミズアオイをモチーフとした透



図-1 ミズアオイ (左; 竹内佐枝子撮影) とコナギ (右) の植物体と花



図-2 日光東照宮国宝東西回廊におけるミズアオイとカモをモチーフにした透かし彫り (栗山由佳子撮影)



図-3 久能山東照宮における波, ミズアオイ, セキレイをモチーフにした透かし彫り (栗山由佳子撮影)

かし彫りや絵が存在する (図-2, -3, -4)。

コナギ *Pontederia vaginalis* Burm.f. は, 水田や池に生える抽水性の一年草で, ミズアオイと類似するが全体に小型である (佐竹 1982; 田中 2015; 図-1 右)。北海道南部～琉球, アジア～オーストラリアに分布し, 北アメリカとヨーロッパに帰化している (浅井 2015; 田中 2015)。日本での開花期は 8～10 月である (田中 2015)。本種も鏡像花柱性の花を着けるが, 開放花が開花前受粉を行う上に閉鎖花も着けるためほぼ自殖性である (Wang *et al.* 1995; 汪ら 1996a)。ただし開放花は開花前受粉によって全ての胚珠が受精しておらず, 開花後の他花受精による種子生産も可能であることが指摘されている (今泉 2010)。

本稿では, 一年生水田広葉雑草であ

ふじのくに地球環境史ミュージアム

早川 宗志

農研機構 中央農業研究センター
生産体系研究領域

内野 彰



図-4 久能山東照宮におけるシロバナミズアオイとオモダカの絵 (栗山由佳子撮影)

るミズアオイとコナギの 2 種について, 学名, 防除, 準絶滅危惧種, 蓮田における生育, 遺伝的多様性の視点から解説する。

学名のポンテデリア属への 組み替え

ミズアオイ科植物は単子葉植物の比較的小さな水生植物からなる科である。汎熱帯に広く分布し, 多様性の中心である新熱帯区には 70% の種が分布している (Pellegrini and Horn 2017)。ミズアオイ科にはこれまで計 30 属が記載されてきたものの, その中のホテアオイ属およびアメリカコナギ属は単系統群ではないことが推察されており (Eckenwalder and Barrett 1986), 分類学的再検討が必要であった。

近年では, 被子植物の塩基配列情報に基づいた APG 分類体系 (Angiosperm Phylogeny Group 2016) が広く採用されている。以前は, 進化の指標とした花卉の数や子葉の数などの特定の共有形質をもとに分類群をまとめていたが, APG 分類体系では, 共通祖先か

表-1 日本に生育するミズアオイ科植物の学名

和名	従来	Pellegrini <i>et al.</i> 2018の見解
アメリカコナギ	<i>Heteranthera limosa</i> (Sw.) Willd.	<i>Heteranthera limosa</i> (Sw.) Willd.
ヒメホテイアオイ	<i>Heteranthera reniformis</i> Ruiz et Pav.	<i>Heteranthera reniformis</i> Ruiz et Pav.
ツルアメリカコナギ	<i>Heteranthera zosterifolia</i> Mart.	<i>Heteranthera zosterifolia</i> Mart.
ハイホテイアオイ	<i>Eichhornia azurea</i> (Sw.) Kunth	<i>Pontederia azurea</i> Sw.
ホテイアオイ	<i>Eichhornia crassipes</i> (Mart.) Solms	<i>Pontederia crassipes</i> Mart.
ミズアオイ	<i>Monochoria korsakowii</i> Regel et Maack	<i>Pontederia korsakowii</i> (Regel et Maack) M. Pell. et C. N. Horn
コナギ	<i>Monochoria vaginalis</i> (Burm. f.) C. Presl ex Kunth	<i>Pontederia vaginalis</i> Burm. f.
ナガバミズアオイ	<i>Pontederia cordata</i> L.	<i>Pontederia cordata</i> L.

ら由来するすべての子孫を含む「単系統群」を分類群とする (邑田 2019)。そのため、例えば農耕地の主要雑草を多数含む旧ゴマノハグサ科は単系統群ではないことが明らかとなり、複数の (単系統の) 科に分割・再編されている (邑田 2019)。

ミズアオイ科の系統解析の結果では、ミズアオイ属およびポンテデリア (*Pontederia*) 属はそれぞれ単系統群であった一方、ホテイアオイ属は非単系統群であった (Pellegrini *et al.* 2018)。そのため、ミズアオイ属およびホテイアオイ属がポンテデリア属に合一されて、旧3属による単系統群を構成することとなった。ポンテデリア属が基準属となった理由は、これら3属の中で最も記載が早く優先権があるためである。同様に、ミズアオイ科のアメリカコナギを含むクレードも *Hydrotherix* 属および *Scholleropsis* 属がアメリカコナギ属に合一されて一つの属となっている (Pellegrini 2017)。以上から、ミズアオイ科は、アメリカコナギ属とポンテデリア属の2属となった。Pellegrini *et al.* (2018) の見解に基づく日本に産するミズアオイ科植物の学名は表-1の通りである。

SU 抵抗性と防除

水田雑草では、1990年代からアセト乳酸合成酵素 (ALS) 阻害剤のひとつであるスルホニルウレア系除草剤に対する抵抗性 (SU 抵抗性) が問題と

なったが、ミズアオイは日本で初めて SU 抵抗性が確認された種である (古原ら 1996)。ミズアオイは、北海道および東北地域で水田雑草として防除対象となる一方、関東以西では水田に発生することは稀で水路や湿地などに生育し、レッドデータブック (環境省 2015) で準絶滅危惧植物に選定されている。

近縁種コナギにおいても SU 抵抗性が報告されており (小荒井・森田 2002; 今泉 2010)、コナギの ALS 遺伝子変異を調べた研究により、抵抗性変異の異なる複数の系統が存在することから、各地で独立に何度も SU 抵抗性が出現している可能性が示唆されている (稲垣ら 2008)。他方、コナギは 1950 年代前半に日本に初めての除草剤 2,4-D が導入される以前は水田の最強害雑草のひとつであったように (住吉ら 2011)、除草剤を施用しない水稲有機栽培においても難防除雑草となる。水稲有機栽培で用いられる米ぬか施肥は土壌溶液の電気伝導率 (EC) を上昇させ、EC が上昇するとコナギ種子の発芽抑制が引き起こされる (Nozoe *et al.* 2012)。そのため、機械除草および米ぬか散布を組み合わせるコナギ等を抑草する水稲有機栽培体系の確立が試みられている (三浦ら 2015)。このように、慣行栽培と有機栽培の両方において、現在でもコナギは難防除水田雑草であり続けている。

準絶滅危惧種としてのミズアオイと攪乱

コナギが水田の難防除雑草であり続けているにもかかわらず、ミズアオイは関東以西で水田に発生することが稀で、環境省 (2015) では準絶滅危惧植物に選定されている。ミズアオイの減少要因については、圃場の乾田化と ALS 阻害剤の施用やその他の複合的な要因が指摘されているが、ミズアオイだけが水田から減少する理由については未だに明快に説明しきれていない (古原ら 2011)。

水田雑草の種子寿命は内藤 (1981) の定義による常命種子 (3~15 年) から長命種子 (15 年以上) まで種によって様々に異なるが (住吉ら 2011)、コナギの種子は土中で 17 年間の生存が確認されていることから (小荒井ら 1998)、長命種子にあたる。ミズアオイも埋土種子集団を形成することから (古原ら 2011)、2 種の埋土種子の寿命が長いことは水田や湿地などにおける耕起、代かき、洪水などの攪乱に適応した生態的特性を表していると考えられる。

例えば、かつて (1958 年頃) 静岡県静岡市麻機沼周辺の水田にはミズアオイが生育していた (前島固女 私信)。麻機沼は埋め立てによる耕地整備により水田となったが、麻機が位置する巴川水系が氾濫した 1974 年 7 月 7 日の七夕豪雨以降は遊水地事業に転換がなされ、湿生植物や鳥類が観



図-5 静岡県静岡市葵区の麻機遊水地におけるミズアオイの生育状況（栗山由佳子撮影）

察できる多目的遊水地として活用されている。麻機遊水地では、治水工事による掘り返しにより1996～1999年にかけてミズアオイの大群落が出現した（図-5）。そこで、攪乱依存種であるミズアオイの保全を目的に、2000年には省力的な攪乱方法として湿地ブルドーザを活用した保全が試みられた（稲垣ら 2007）。現在でも、行政と麻機ウェットランドクラブなどの市民によって、手作業による耕起などの攪乱により、ミズアオイ群落が維持・保全が行われている。同地では現在の保全場所以外でも攪乱が起きるとミズアオイの小集団の出現と消失が確認されることから、多くの埋土種子が存在していると考えられる。また、2011年の東日本大震災において津波の被害を受けた東北3県の海岸部では、津波被害後にミズアオイをはじめとする希少種が再生した事例が複数報告されている（例えば、島田 2014）。これらの場所の中には、元々ミズアオイの生育が確認されていなかった地点も多く、津波の攪乱によって埋土種子から出現したと考えられる（島田 2014）。ミズアオイにはこうした攪乱に依存した生態的特性が認められる。

蓮田と休耕蓮田に生育するミズアオイ

ミズアオイは現在では関東以西の水田で発生することは稀であるが、蓮田および休耕蓮田で発生する事例を紹介する。



図-6 静岡県静岡市葵区の麻機遊水地周辺の蓮田におけるあさはた蓮根の収穫の様子とミズアオイの生育（2007年10月10日；栗山由佳子撮影）

麻機遊水地周辺の蓮田には、ミズアオイが生育している。蓮田におけるミズアオイの防除は、栗山由佳子（私信）の蓮根農家への聞き取りによれば、「レンコンが除草剤に弱いから、雑草は手で抜かなきゃなんねえからえらい（大変）だよ。夏前に草取りするだけえが、ハスの葉がえかく（大きく）なっちゃうと中へへえられにゃあ（入られない）から、取り残しがあると秋にミズアオイの花が咲くだよ」という話を伺っている（図-6）。また、麻機の別の蓮根農家からは、「ミズアオイを蓮田の隅にわざと残し、秋に刈り取ってニワトリの餌にしていたこともある」という証言もある（栗山由佳子 私信）。麻機の蓮田では泥が深いことから機械化ができずに作業の大変さのため後継者が減っており、蓮根農家は20人ほどである（静岡新聞 2003）。かつて15 haほどあった蓮田は、道路用地になったり土地改良が進んだりして現在では2 haに減少している（静岡新聞 2003）。

レンコンの栽培面積が全国1位（1,660 ha）である茨城県においても（農林水産省 2019）、霞ヶ浦周辺の蓮田および休耕蓮田にミズアオイが発生する



図-7 茨城県稲敷郡阿見町廻戸周辺の蓮田に生育するミズアオイ（2001年6月21日；池田浩明撮影）



図-8 茨城県稲敷郡阿見町廻戸周辺の休耕蓮田に生育するミズアオイ（2003年8月28日；池田浩明撮影）

（高木ら 2016，池田浩明 私信）。ミズアオイの個体数は、栽培中の蓮田では少ないものの（図-7）、休耕蓮田にはたくさん出現するため（図-8）、休耕蓮田が種子の供給源として機能しているものと考えられる（池田浩明 私信）。なお、蓮田で登録されている除草剤は藻類を除草するとき用いるACN剤（モゲトンジャンボ、モゲトン粒剤）のみである。

遺伝的多様性

ミズアオイとコナギにおけるアイソザイム変異の研究から、不完全ではあるが自殖回避機構を持つミズアオイ集団は大きな遺伝的多様性を持つ一方、ほぼ自殖性のコナギでは遺伝的変異が少ないことが報告されている（Wang *et al.* 1995；汪ら 1996a）。他方、

表-2 葉緑体 DNA の *rps16* イントロン領域におけるミズアオイとコナギの塩基多型サイト

種名	塩基多型サイト							産地
	7 0	8 1	- 5	8 7	1 0	2 4	3 3	
ミズアオイ	T	---		T	T	T		北海道夕張郡長沼町
ミズアオイ	T	---		T	T	T		北海道札幌市中央区
ミズアオイ	T	---		T	T	T		秋田県山本郡三種町
ミズアオイ	G	---		T	T	T		宮城県名取市
ミズアオイ	T	---		T	T	T		福島県双葉郡楢葉町
ミズアオイ	T	---		T	T	T		静岡県静岡市
ミズアオイ	G	---		T	T	T		愛知県春日井市
コナギ	G	CATAA		C	C	G		宮城県栗原市栗駒八幡
コナギ	G	CATAA		C	C	G		秋田県大曲市四ツ屋
コナギ	G	CATAA		C	C	G		福島県会津美里町
コナギ	G	CATAA		C	C	G		長野県駒ヶ根市下平
コナギ	G	CATAA		C	C	G		長野県
コナギ	G	CATAA		C	C	G		兵庫県加西市
コナギ	G	CATAA		C	C	G		徳島県名西郡石井町
コナギ	G	CATAA		C	C	G		福岡県宮若市

AFLP 解析から、コナギ集団においても遺伝的に単一な集団のみではなく、遺伝的に離れた個体が混在する集団も存在することが示されている（今泉 2010）。さらに、両種は、形態的特性および日長反応特性に関して、緯度が高くなるに伴って草丈、花序の有花部分の長さ、花茎長、葉柄長が小さくなり、開花が早くなるという形質変異の地理的勾配が存在する（汪ら 1996b, 2010）。そのため、関東以西の局所的に分布するミズアオイ集団を保全する場合、遺伝的多様性や地理的な分布パターンを考慮することが必要と考えられる。そこで、以下に日本産ミズアオイおよびコナギの葉緑体 DNA の塩基配列における変異を調査した結果を紹介する。

2002, 2003 年に採種後、冷蔵保存していた日本産ミズアオイ 7 地点およびコナギ 8 地点の種子各 1 粒から DNeasy Plant Mini Kit (Qiagen) を用いて全 DNA を抽出した。抽出した DNA 1.25mL を鋳型に全量 16.6mL で PCR を行い、葉緑体 DNA を増幅した。プライマーは, Taberlet *et al.* (1991), Nishizawa & Watano (2000) を用いた。ExoSAP-IT 処理後の PCR 産物について塩基配列を決定し, MEGA7 を用いて Clustal W によるアライメントを行い (Kumar *et al.* 2016), 地点間の塩基配列を比較した。予備実験から, ミズアオイの 2 領域 (*rps16* イントロン, *trnG* (UCC) イントロン) において 1 塩基多型が存在した。そこで, *rps16* イントロン領

国土地理院承認 平13総根 第367号



図-9 日本におけるミズアオイとコナギの地理的分布。●はミズアオイの 70 塩基目が G の系統を, 橙色の●はミズアオイの 70 塩基目が T の系統を, □はコナギを示す。Mapmap Ver6.0 (鎌田 2005) を改編して作図

域を用いて, 両種の塩基配列を決定した (表-3)。その結果, コナギはいずれのサンプルからも *rps16* イントロン領域から多型を見いだせなかった。コナギは東南アジアを原産地とする水稻随伴植物として渡来した史前帰化植物とされていることから (笠原 1968), 稲作と共に全国に 1 系統が急速に分布拡大した可能性を示しているのかも

しれない。他方, 日本産ミズアオイの葉緑体 DNA から 2 系統を見出したが, 明瞭な地域性を見出せなかった (表-2, 図-9)。なお, 予備実験で多型を見出した残りの 1 領域 (*trnG* (UCC) イントロン) においても, ミズアオイの塩基配列を決定できたサンプルは *rps16* イントロンの結果と一致する 2 系統性を示したが, コナギからは遺伝

的多型は見出せなかったため（早川・内野 未公表），コナギよりもミズアオイの方が遺伝的多様性は高いと考えられる。

本結果は限られた地点のサンプルと葉緑体 DNA 領域を用いた予備的なものであるため，ミズアオイの地域性を論じるに足る十分な情報は得られなかった。既報のアロザイム変異から，ミズアオイは集団内の遺伝的変異が集団間よりも大きいことが報告されており，ミズアオイにおける遺伝的変異の約 61% は集団内個体間に存在している（汪ら 1996a）。そのため，古原ら（2011）が指摘するように，開発事業等の保全対策や環境配慮でやむを得ず移植する場合などは，集団の遺伝的多様性を保全するために十分な個体数および埋土種子集団を移植することが必要である。

ミズアオイおよびコナギには集団内外における遺伝的，生態的，形態的な変異が存在する（汪ら 1996a, 1996b, 2010; 今泉 2010）。そのため，今後は国内のみならず 2 種の分布域を網羅する広域的かつ詳細なサンプリングを行い，次世代シーケンサーを用いた高解像度の系統地理学的研究や集団遺伝構造を把握することで，2 種の遺伝的多様性に基づいた防除や保全につなげることができらるだろう。

謝 辞

本稿の一部は，公益財団法人日本植物調節剤研究協会および JSPS 科研費 15H04446, 26310304 の研究助成を

受けて実施したものである。ミズアオイおよびコナギの採種にご協力いただいた方々ならびに写真および自生地情報提供をいただいた池田浩明氏，汪光熙氏，栗山由佳子氏，竹内佐枝子氏に感謝します。

引用文献

- Angiosperm Phylogeny Group 2016. An update of the Angiosperm Phylogeny Group classification for the orders and families of flowering plants: APG IV. *Bot. J. Linnean Soci.* 181, 1–20.
- 浅井元朗 2015. 植調雑草大鑑. 全国農村教育協会，東京。
- Eckenwalder, J.E. and S.C.H. Barrett 1986. Phylogenetic systematics of Pontederiaceae. *Syst. Bot.* 11, 373–391.
- 古原洋ら 1996. 北海道における水田雑草ミズアオイのスルホニルウレア系除草剤抵抗性. *雑草研究* 41 (別), 14–19.
- 古原洋ら 2011. 雑草モノグラフ 7. ミズアオイ (*Monochoria korsakowii* Regel et Maack). *雑草研究* 56, 166–181.
- 藤野美海ら 2016. 花の鏡像花柱性の適応的意義. *雑草研究* 61, 32–37.
- 今泉智通 2010. DNA 多型解析を用いた水田雑草コナギにおけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性の研究. *雑草研究* 55, 82–88.
- 稲垣栄洋ら 2007. 湿地ブルドーザを利用した攪乱依存型絶滅危惧植物ミズアオイとオオアブノメ群落保全の取り組み. *日本緑地工学会誌* 33, 235–238.
- 稲垣栄洋ら 2008. 静岡県におけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性コナギの分布. *雑草研究* 53, 123–127.
- 鎌田輝男 2005. Mapmap, v. 6.0. Available from URL: <http://www5b.biglobe.ne.jp/t-kamada/CBuilder/mapmap.htm>
- 環境省（編）2015. レッドデータブック 2014 – 日本絶滅のおそれのある野生生物 – 8 植物 I (維管束植物), 646p. ぎょうせい，東京。

- 笠原安夫 1968. 日本雑草図説. 養賢堂，東京. pp. 358–361, pp. 399–402.
- 小荒井晃・森田弘彦 2002. 秋田県および茨城県におけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性生物型コナギの出現. *雑草研究* 47, 20–28.
- 小荒井晃ら 1998. 22 年間耕土下層に埋土した水田雑草種子の発芽率. *雑草研究* 43 (別), 224–225.
- Kumar, S. *et al.* 2016. MEGA7: Molecular Evolutionary Genetics Analysis version 7.0 for bigger datasets. *Mol. Biol. Evol.* 33, 1870–1874.
- 三浦重典ら 2015. 機械除草と米ぬか散布等を組み合わせた水稲有機栽培体系の抑草効果と収量性. 中央農業総合研究センター研究報告 24, 55–69.
- 邑田仁 2019. APG 分類体系. 日本大百科全書 (ニッポニカ). 小学館，東京.
- 内藤俊彦 1981. 種子用語解説. In 沼田真 (編) 種子の科学 – 生態学の立場から –. pp. 203–221. 研成社，東京.
- Nishizawa, T. and Y. Watano 2000. Primer pairs suitable for PCR-SSCP analysis of chloroplast DNA in angiosperms. *J. Phytogeo. Taxon.* 48, 63–66.
- Nozoe, T. *et al.* 2012. Suppressive effect of rice bran incorporation in paddy soil on germination of *Monochoria vaginalis* and its relationship with electric conductivity. *Soil Sci. Plant Nutrition* 58, 200–205.
- 農林水産省 2019. 平成 30 年産野菜生産出荷統計. 2020 年 7 月 20 日確認. <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/index.html>
- Pellegrini, M.O.O. 2017. Two new synonyms for *Heteranthera* (Pontederiaceae, Commelinales). *Nordic J. Bot.* 35, 124–128.
- Pellegrini, M.O.O. and C.N. Horn 2017. Two peculiar new species of *Heteranthera* Ruiz & Pavon (Pontederiaceae) from Brazil, with notes on inflorescence architecture in the family. *PhytoKeys*

- 82, 35–56.
- Pellegrini, M.O.O. *et al.* 2018 Total evidence phylogeny of Pontederiaceae (Commelinales) sheds light on the necessity of its recircumscription and synopsis of *Pontederia* L. *PhytoKeys* 108, 25–83.
- 佐竹義輔 1982. ミズアオイ科. In 佐竹義輔ら(編)日本の野生植物I草本, p. 59. 平凡社, 東京.
- 島田直明 2014. 東日本大震災による津波が岩手県の海岸植生に与えた影響およびその後の植生再生と保全状況について. *植生情報* 18, 44–54.
- 静岡新聞(夕刊)2003. 「静岡麻機レンコン」. 2003年10月17日.
- 住吉正ら 2011. 特集3. 難防除雑草の埋土種子調査 水稲作における難防除雑草の埋土種子調査法. *雑草研究* 56, 43–52.
- Taberlet, P. *et al.* 1991. Universal primers for amplification of three non-coding regions of chloroplast DNA. *Plant Mol. Biol.* 17, 1105–1109.
- 高木素紀ら 2016. 茨城県のハス田内部および周縁部における雑草や野良生えハス *Nelumbo nucifera* へのレンコンネモグリセンチュウ *Hirschmanniella dibersa* の寄生と増殖の可能性について. *関東東山病害虫研究会報* 63: 98–101.
- 田中法生 2015. ミズアオイ科. In 大橋広好ら(編)改訂新版日本の野生植物1 ソテツ科～カヤツリグサ科. 平凡社, 東京. 270–271.
- Wang, G.-X. *et al.* 1995. The Enantiostyly and the pollination biology of *Monochoria korsakowii* (Pontederiaceae). *Acta Phytotax. Geobot.* 46, 55–65.
- 汪光熙ら 1996a. ミズアオイとコナギにおけるアイソザイムの変異. *雑草研究* 41, 255–263.
- 汪光熙ら 1996b. ミズアオイとコナギの開花の日長反応特性. *雑草研究* 41, 241–246.
- 汪光熙ら 2010. ミズアオイ属水生雑草の形態における変異. *雑草研究* 55, 245–253.

くさぐさ
田畑の草種

継子の尻拭い
(ママコノシリヌグイ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

タデ科イヌタデ属のつる性の一年草。全国の休耕田、河川敷、原野などの湿った所に生える。茎葉はよく分枝ししばしば藪を形成する。丈は1mから2m。葉は三角形から長三角形。5月から10月に枝先に米粒大のピンク色の花が10個ほど集まって咲く。茎の稜、葉柄、葉の裏面脈上などあらゆるところに逆刺がある。この逆刺により他の植物に絡みつく。

「ヘクソカズラ」や「イヌノフグリ」、「ハキダメギク」などと並んで植物名の悪名の代表格とされる。中でも「ママコノシリヌグイ」は、名付け親の牧野富太郎によれば「和名は逆向きの刺のある茎で継母が憎い継子の尻を拭く草という意味」というほどに、凄まじい差別的な名前ではある。命名にあたって、牧野はその名をすでに各地で呼ばれていた名前から採ったのではないかといわれるが、では、実際に、昔はこの草で継子の尻を拭くといういじめが行われていたのであろうか。

継子いじめの歴史は古い。神話時代や子どもが共同体で養育されていた時代にはなかったことであるが、妻が夫のもとへ移って一緒に暮らし始めたころから起こってきた。日本での「継子いじめ譚」の典型は「落窪物語」であるが、この物語は、平安中期の貴族社会を写實的に

記述した物語とされている。そうであれば、平安時代の中頃には「シンデレラ」と同じ継子いじめが行われていたとも考えられる。

これらの「継子いじめ譚」の対象はほとんどが女の子であり、悲惨な死という結末もあるが、継子が人や動物に助けられ後に成功を掴み取るという結末が多い。実際には、様々な形で継子いじめが行われていたのであろうが、シンデレラにせよ落窪の姫にせよ、もう、継母が尻拭いしなければならぬような歳ではなかった。尻拭いしなければならぬとすればまだ赤子である継子ではないだろうかと思えるのである。

そうであれば、刺だらけのこの草で赤子の尻を拭くとはどうなるのか。憎い継子であってもその仕打ちはあまりにもむごすぎることなのだ、と継母の継子への仕打ちを戒めようとして名付けたのではないだろうか、という考えに至るのである。

多くの「継子いじめ譚」が継子いじめを戒めようとして昔話として語られてきたように、刺だらけのこの草で赤ん坊の尻を拭くような「継子いじめ」を戒める意味で「継子の尻拭い」と呼ばれてきたのではなかろうか。

因みに韓国では「嫁の尻拭き草」と呼ばれるそうである。